姿見

九回目のお正月

宮の前分会　塚本　みすえ

今年も夫と、小学六年生の紀代美と、私との親子三人の、正月の朝を迎えます。

こういえば、どこにでもみられる平和な家庭の正月風景を思わせるかもしれません。

毎年同じことのくり返しですが、私は今年もまた夫に、新年らしく「おめでとう」といいます。すると夫は、黙って座っているだけです。

それを二～三回くり返していうと、夫はやっと小さな声で、それも口の中で「おめでと」、といってくれます。

夫は、毎年正月には、入院先の労災病院から一週間の外泊で家に帰ってきます。うれしいはずの外泊も、私にとっては、くやしさと悲しさと腹立たしさになってしまいます。家にいる一週間の間に、私から声をかけないと、夫は自分からしゃべることはまずありません。それでも三回位いは私に声をかけます。「タバコがない」「クスリを」――というぐらいのことです。

私にとって、そしてまたCO患者の家族や遺族にとって、忘れることのできない〝三川鉱大爆発〟から、今年は九回目のお正月を迎えました。

私達親子にとって、苦しい八年間でした。

あの事故当時、夫はまだ三十七才でした。働きざかりの、採炭夫だったのです。

そして長男が中学一年、長女が小学五年、次女の紀代美がやっと四才になったばかりでした。ですからあの災害はわが家にとって、ちょうど峠に登りかけたような頃に起こったのでした。

夫の被災によって、わが家の生計は、いや応なく、私の肩にのしかかってきました。私は三人の子供をかかえて働きに出かけ、ただひたすらに夫の全快のみを待ちました。

八年が過ぎました。二人の上の子どもは親もとをすでにはなれて、独立できるようになりましたが、夫の病状はあれ以来なんの前進もみられません。「オギャー」、と生まれた赤ン坊ですら、八年の歳月がたてば、本も読めるようになるし、計算さえできるようになります。それなのに今年四十五才の大人が三才か四才の子どもよりも悪いのです。

昨年の十一月二十日――土曜から月曜にかけて、夫が外泊で帰ってきました。いつも月曜日の朝の九時十五分に、万田公園前まで、外泊の患者を送り迎えする会社の車が迎えにきますので、私はその場所まで、出勤前に夫を送っていってやりました。

ところが患者の外泊はそのとき一日伸びていたのだそうで、したがって、その日は迎えの車が来なかったのだそうです。それを、夫はいつまでも、その場にただじっと立って、待っていたのだそうです。同じ地域分会の松田さんが、その場に昼頃通りかかり、病院に電話していただいたおかげで、はじめて迎えにきてもらえたのだそうです。そのことをあとで聞き、私はもう悲しさを通り越して、なさけなさでいっぱいでした。

事故後八年たった今でも、外泊が一日伸びたことがいえない夫。迎えにも来ない車を待ったまま、病院へも家へもひとりでは帰れない夫。この夫を思いますとき、妻の私は夫があわれであわれでならず、胸の中をかきむしられる思いが致します。

こんなさまの夫をみていますと、ともすれば「もう仕方がないんだ」という、あきらめにも似た気持が胸の中をかすめます。このような私たちCO患者の家族の胸のうちは、「これを経験した者にしか判らないんだ」、という気持にさえなります。

しかしこの気持こそ、麻痺にも似た威力をもって、人びとの心をおかしてゆきかねません。そしていつの間にか、会社へのにくしみを忘れて、自分ひとりの心の中にとじこもってしまって、闘ってゆく力を失ってゆくのではないか、と恐ろしくなる私です。

塚本さん

しかし私たち働く者の未来というものは、たたかう以外に開けるはずがありません。それこそはまた、資本によって人間として生きることの権利を拒否された人間と、その家族の真実の叫びでもあるのです。

×

塚本さんのお住居は「荒尾市万田社宅山上町」です。

なお、この〝姿見〟欄は、三池の主婦の皆さんのものです。どうか積極的に、この欄へのご投稿をお願いします。ますます素晴らしい〝姿見〟にしましょう。

愛情と助け合いこそ

三池主婦会長　久保時江

日常活動に追われながら、あわただしい中に新しい年を迎えました。

年の初めにあたりまして、私たちは労働者家庭の主婦として何をなすべきか、また主婦会運動に何を求めてゆけばよいか、真剣に考える必要があると思います。

社会の変動の中で、経済の高度成長は組合員・主婦をマイホーム主義にかりたて、どんどんあがる物価高の中では、主婦も外へ働きに出なければ食べてゆけない現実となり、そのため組合や主婦会の諸集会にも出席が少くなり、主婦会活動を強めなければ……という気持に相反して、いよいよ動員なども苦になる悩みがあります。

一方主人たちは第四次石炭答申に基く合理化攻撃を受けて、常に生命の危険におびえながら職場・地域で闘っています。

いよいよとなれば、きりりとハチマキをしめ、がっちりと腕を組んで闘いに立ちあがる三池の主婦。

合理化は急ピッチで進められ、シールド自走枠の導入によって三千人＝二万トン（日産）・体制がしかれようとしています。

私たちは忘れません――昭和三十八年十一月九日の三川鉱大爆発を。その爆発で四百五十八名の仲間が殺され、八百名にも及ぶCO患者がつくり出されたことを。

私たちは今も胸を張って闘い続けていますが、CO闘争は、数々の思い出をいつまでも私たちの心に残しながら続けられてゆくことでしょう。

いつわりの「沖縄の核ぬき」、「本土なみ」返還協定は、世論の強い反対をふみにじって、十二月二十二日の国会で承認されました。そのため今後も沖縄県民の皆さんは、これまでと変らず軍事的緊張の中で、「基地の沖縄」から抜け出ることができず、生きていかなければならないでしょう。断じて許されないことです。私たちは今後も、本当の沖縄返還を勝ち取るため、組合と共に闘っていかねばならないと思います。

わが国の将来、自分たちの今後の生活はどうなるのか、考えればいやになる時もあります。何はおいても新しい年――一九七二年春闘で、主婦も大いにハッスルして他産業なみの賃上げを勝ち取ることが大切です。

労働者階級の歴史は、事実において勝利の歴史です。

年ごとに生命と暮らしをおびやかす公害がふえ、物価があがり、合理化攻撃がはげしくなっていますが、だからこそ生命と権利を守るためにスクラムを組んで頑張らなければならない、と思います。

皆さんと共にお互いに愛情をもって結び合い、助け合いながら、今年はさらにうるおいのある主婦会活動を前進させてゆくために、力を合わせてまいりましょう。

〝長男誕生〟に思う

三川　前川　哲也

生活綴り方

日本の政治は、大きな転換を遂げようとしている。また、経済はインフレ傾向を強めながら動いている。その中で、現在の自分の賃金では、親子五人食べることがやっとなのだ。これを思うとたとんに子供の誕生を手ばなしで喜べなくなってしまう。その解決策を、なんとか……。

いまわが国の政治は、大きな転換を遂げようとしている。また、経済はインフレ傾向を強めながら動いている。その中で、現在の自分の賃金では、親子五人食べることがやっとなのだ。これを思うとたとんに子供の誕生を手ばなしで喜べなくなってしまう。その解決策を、なんとか……。

派な社会人――いや自分の思うことを自由に発言し、行動できる人に育てる教育をしなくてはならぬ。そのためには、まず私自身が努力をしなくてはならないのだ。

子供は〝親の鏡〟とさえいわれる。今の私で、果してそれができるだろうか。思想、行動、さらに経済的にどれだけ子供のためにやってやれるのだろうか。大きな不安が体中を、血のようになってかけまわる。

まわりの人は、「男の子だったそうでうれしいでしょう。本当によかったですね」、と自分のことのように喜んで下さるのに、すなおに返答できない自分。

さて、生まれた長男の名前は、〝和憲〟とつけ、翌十二日にはさっそく戸籍届をすませた。

先の参議院選挙で明らかに示されたように、日本の政治は大きく変化しつつある。すなわち国民全体が、労働者階級が、現在の平和憲法をいかにして守り、国民福祉、生活の向上安定をいかにして実現するか、大きな課題となっている。私は、生まれたばかりの子供が、今の平和憲法を守り、立派な労働者階級の一人として必ず努力をしてくれるようにと、親のねがいは馬鹿なもので、平和憲法と書く文字の中からとって、和憲と名ずけたのである。

考えれば、子供の名前ばかりよくても、その名前に負けないだけの人間に育てるには、親として何をどれだけするかが大きな課題となるのだが。

昨年暮れの自分のように、会社をやめるの、炭鉱を逃げ出すの、といった心のまよいがまた出てくるのでは、親の資格はないのだ。

私のまわりには、多くの仲間がいる。他人のことを自分のことのように喜んだり、怒ったり、そして泣いてくれる仲間がいる。このあたたかい仲間と手を取りあって歩きながら、今の親の苦しみを、生まれた子供たちにもさせるようなことがないための努力をすることが、親としての責任なのだ。

私は、子供の誕生のもつ意味を石炭産業を包むきびしい情勢の中でかみしめながら、喜びと不安の思いを抱いて、今日も、明日も前進しなければならぬ。

酒百科

（もっこすから）

新年といえば〝酒〟です。この酒について、宮浦指導部の一つの職場新聞〝もっこす〟（開発・測量・検収）は次のようなおもしろい紹介をしています。

×

来歴＝紀元前三千年の太古の昔から、発酵で自然に酒ができることを、人類は発見した。最初はブドウ酒。あと穀物を原料に、各地・各民族の特徴のある酒造りが発達した。

分類＝酒税法によると、アルコール分一度以上となっており政府の許可により、酒造りは十種に分類されている。

効害＝少量の飲酒は胃液の分泌・食欲増進となり、疲労回復によい。アルコール濃度が、血液中の千分の一はほろよい、千分の二は上きげん、千分の三でろれつがまわらず、千分の四でくだまくとされ、長寿者の飲酒量は千分の二程度だと。めいてい者保護取締法もある。念のため。

飲み方＝日本酒は今はカン酒が多いが、昔は冷が原則だった。タンパク質の食物は悪酔防止に。酔ざましには柿。

民俗＝古代、神事用にのみ造られ、自由に飲めるものではなかった。あと、必ず集まって飲むものとされ、さらに一人で飲めるようになっても、大衆は権力の収奪の下では酒どころではなかったかも知れない。